

日本語学習者の理解程度に影響を及ぼす要因

—中国籍モンゴル語母語話者と中国語母語話者の聴解テストを比較して—

劉 永亮

1. はじめに

最近の外国語習得では、コミュニケーション能力の強化が重視されることから、聴解力が果たす役割の重要性が指摘されるようになった。しかし、尹(2000)では、中国における日本語学習者は聴解に対して最も困難を感じる事が指摘されている。国際交流基金(2007)では、「日本語能力試験」の結果を母語別分類に、海外と日本国内に分けて分析している。その結果、国外受験者の得点¹(標準得点による)に関して、ヨーロッパ系の受験者は聴解得点が中国語系の受験者の聴解得点より高いが、文字・語彙、読解・文法の得点は中国語系の受験者方が高いという結果が出ている。このことから中国人日本語学習者にとって、日本語学習の4技能のうち聴解が一番難しいことがうかがえる。

しかし、上記の国際交流基金(2007)の母語分類を見てみると、必ずしも母語で受験者を分けて分析しているわけではなく、母語というよりは、むしろ国籍で大体の母語を分けているに過ぎない。例えば、中国の学習者の中には、モンゴル語を母語とする学習者や、他の言語を母語としている学習者が含まれていると思われる。中国籍であっても、中国語とモンゴル語は言語的特徴が異なるにもかかわらず、一括りにして扱っているのである。つまり、国際交流基金(2007)の結果からは、モンゴル語を母語とする学習者の聴解能力は見えてこない。そこで、中国籍の日本語学習者を母語別に分けて考える必要があると思われる。

2. 先行研究

聴解テストに関する島田(2006、2009)の研究では、「選択肢の提示形式」が聴解テストの結果に影響を与えると述べたが、母語の違いによる影響に関しては言及していない。

聴解過程に関しては、主に聴解過程で使用されたストラテジーをめぐって研究が行われてきている(古川他 1992、水田 1995、同 1996、尹 2001)。それらは主に、聞き

¹ 2004年度の日本語能力試験の2級の母語グループ別平均点(標準得点による)を例としてあげた(国際交流基金 2007)。

手がどんなストラテジーを使って聴いているか、どのようなストラテジーが有効であるか、どのような聴解指導を行えばよいか、と言う点を述べている。しかし、それは、問題を処理するときのストラテジーのみに焦点をあてており、聴解過程でどのような問題起が起きているかに関しては述べていない。

3. 研究概要

3.1 研究の目的

本論では中国人日本語学習者を中国籍モンゴル語母語話者(以後、MS : Mongolian Speaker)²日本語学習者と中国語母語話者(以後、CS : Chinese Speaker)日本語学習者を母語別に分類し、聴解テストの結果に差が生じるかを分析する。

また、両グループの聴解テストの結果に差が生じるようであれば、その原因について、受験者の聴解過程に注目し焦点を当て、聞き取り上にどのような問題が起きているかを明らかにする。

3.2 研究方法

3.2.1 統計調査

内モンゴルの大学に在学する日本語専攻の学生を対象に聴解テストを行う。その結果から、母語グループによる平均値、標準偏差などを算出する。グループ間で差が生じた場合、母語グループの平均値と項目別平均値を、t 検定を用いて確認する。

3.2.2 質的調査

統計調査で明らかになった平均値に差が生じた項目を、二グループの受験者がそれぞれどのように聴いているか、またどのように回答を選んでいるか、受験者の中から無詐偽でそれぞれ 10 人を抽出し、発話思考法を用い、プロトコル分析を行う。

4. 聴解テストに関する統計調査

4.1 調査内容

2009 年 8 月に内モンゴルの大学に在学する日本語専攻³の MS 83 名と CS 137 名を対象に、聴解テストを行った。本来、日本語能力試験の過去問題を使用するのが理想的であるが、過去問題はすでに市販されているため、学習者はすでにそれらに触れている可能性が高い。そこで、神村・劉ら (2010) の首都大学東京留学生用のプレース

² モンゴル語を母語とし、中国語を第二言語とする中国籍モンゴル人のこと。

³ 学習者が大学に入る前の日本語学習歴は 0。現在大学 3 年生。

メントテスト「TMU 聴解テスト」を用いた。

4.2 調査結果

母語グループによる平均値、標準偏差などは表1の通りである。表1から分かるように、母語別のクロンバック α 係数（信頼係数）はいずれも 0.8 を上回り、信頼係数が高いテストであるといえる。母語によって平均値に差があるか、t 検定を行ったところ「 $t(208)=3.32, p<.01$ 」で、有意差が見られた。このことから、CS のほうが MS と比べると聞き取り能力が弱いことが伺える。

表1 基本統計量

母語	項目数	受験者	平均値	標準偏差	信頼係数 (α 係数)
モンゴル語	30	83	17.6	5.5	0.875
中国語	30	137	14.6	6.7	0.807

さらに、テストの結果を詳しく検討していくために、母語別に各項目の正答率を比較し、t 検定を行った。その結果、30 項目の中の 9 項目に有意差が確認できた。両グループは有意差が見られた 9 項目をどのように聞いているかに関してプロトコル分析を行った。

5 プロトコル分析を用いた聴解過程に関する調査

5.1 調査手順

今回のプロトコル調査は海保・原田（1993）を参考とした。実施時間は、練習セッションを含め、1 人当たりおよそ 1 時間である。まず、プロトコルデータを収集する前に発話思考法とは何かを説明した。そして、声を出す練習として用意した計算問題を被験者がどのように解いているかを声に出しながら練習してもらった。また、実際のプロトコルデータ収集セッションでは、調査の目的を説明した。

5.2 プロトコルデータ分析の手順

以下の手順でデータの分析を行った。

(1) 発話をすべて文字化した。発話思考法データ収集では、被験者の多くは自分の母語を使い、聞き取れなかった語句や自分の母語で適切に表現できない語句のみを日本語で表現していた。そのため被験者の母語を文字化し、その後日本語訳を行った。

日本語訳に関しては長年日本語教育に携わっている日本語教育博士課程の大学院院生1名にチェックしてもらった。

(2) 発話思考法データから、CSとMS両者の聞き取りの過程で起きた問題を探り、その特定された問題はなぜ起きているかを分類し、両者を比較して分析した。

5.3 特定された問題の原因とその分類

聴解過程で聞き取れない問題が生じたときに報告された「問題特定」を、表2に示す。報告された「問題特定」を聴解問題の構造の観点から上位分類として、「課題の理解」、「内容の理解」、「ポイントの理解」⁴「選択肢の理解」という4段階に分類した。さらに、下位分類としてその原因によって、「聞き取りレベル」、「語彙レベル」、「談話統語レベル」との3レベルに分類した。分類と定義に当たって、20人のデータを母語別に扱い、それぞれ2人の判定者⁵が判定を行った。判定者の意見が一致するまで討論し、専門家の助言を得たうえで分類した。母語別判定者の一致率は93%である。

表2 問題特定の定義と分類

上位分類とその定義	下位分類とその定義
課題の理解 ：聴解問題の課題が分からなかったため、どこに注意を払って聞けばよいのか分からず、正解を選べない場合	聞き取りレベル ：報告する際、音をそのまま再現することができないもの。音自体が聞き取れなかった場合と、音が正確に聞こえていても意味がわからず報告するまでに忘れてしまったものなどにより生じた問題
	語彙レベル ：単語の音を正確に聞き取れたが、意味を理解できないことにより生じた問題
内容の理解 ：会話を聴いて内容が理解できていない	聞き取りレベル ：単語を音韻的に聞き取れなかった可能性や、意味が分からなかった可能性がある問題特定

⁴ 『日本語能力試験出題基準』(2002)によると聴解テストの測られる能力の一つとして不必要な細部にこだわらず、重要な部分に焦点を当てて聴くなどの聴くためのストラテジーを駆使する能力である。そのため、正解に直接導くキーワード、つまり課題が示されている部分、または、正解が明示されたり、暗示されたりしている部分を「内容の理解」の問題特定から分けることにした。

⁵ 中国語母語話者の判定者は筆者と、日本語教育経験が長い博士課程の大学院院生(中国語母語話者)の2名。「中国籍モンゴル語母語話者」の判定者は筆者自身と日本語学習歴10年以上の、教育学を専攻する博士課程の大学院院生(中国籍モンゴル語母語話者)の2名。

い、或はテキストの中のいくつかの単語を聞き取ったが、全体の意味が分からないために、正しい答えを選べない場合	語彙レベル ：単語を音韻として正確に聞き取れたが、意味を理解できず、問題が生じている場合
	談話統合レベル ：まとまりのある会話を聴いて、テキスト全体から話し手の意図や主張を理解できないレベル
ポイントの理解 ：会話を聞いて、話の流れや内容をある程度理解したが、正解に直接導くキーワード、つまり課題が示されている部分、または、正解が明示されたり、暗示されたりしている部分を聴き逃し、正解を選べなくなる場合	聞き取りレベル ：単語を音韻的に聞き取れなかったり、意味が分からなかったりする可能性がある場合
	語彙レベル ：正解に直接導くキーワード、或は正解が明示したり、暗示したりしている部分の単語の意味が分からなかったことにより、問題が生じる場合
	談話統合レベル ：テキストの中の多くの情報を報告したが、一番重要な部分、正解に直接導くキーワード、または正解が明示されたり、暗示されたりしている部分が何も報告されない場合
選択肢の理解 ：選択肢を聞き取れない、或いは、音韻として聞き取れても意味が分からないので正しい答えを選べない場合	聞き取りレベル ：選択肢のなかの単語などの音が特定できず、問題が生じる場合
	語彙レベル ：選択肢のなかの単語などの意味がわからず、問題が生じる場合

5.4 聞き取れない原因の分析

被験者に特定された問題を上記の基準によって分類すると、表3のようになる。表3から分かるように、MSでは、問題は全部で38件報告され、CSでは全部で71件報告された。母語類別の上位の各分類における報告件数から見ると、「課題の理解」が3件と13件、「内容の理解」が25件と40件、「ポイントの理解」が10件と11件、そして「選択肢の理解」が0件と7件が報告された。聴解過程では、「課題の理解」と「選択肢の理解」による問題はMSの聴解テストの正答率にそれほど影響を与えていないことが分かった。それに対してCSは、全ての問題特定が聴解テストの正答率に影響あることが分かった。また、下位分類をまとめて観察すると、CSには、「聞き

取りレベル」は 42 件で一番多く報告され、全体の半分以上を占めている。次に、「談話統合レベル」が 20 件報告された。このことから、CSの方がMSに比べて、「音が特定できない」ことが原因で問題が生じることが多いと言える。

表3 聴解過程で特定された問題

上位分類	下位分類	MS	CS
課題の理解	聞き取りレベル	0	10
	語彙レベル	3	3
	合計	3	13
内容の理解	聞き取りレベル	3	18
	語彙レベル	9	5
	談話統合レベル	13	17
	合計	25	40
ポイントの理解	聞き取りレベル	6	8
	語彙レベル	2	0
	談話統合レベル	2	3
	合計	10	11
選択肢の理解	聞き取りレベル	0	6
	語彙レベル	0	1
	合計	0	7
合計		38	71

一方、MSを見てみると、特定された問題の多くは「語彙レベル」と「談話統合レベル」で、それぞれ、14件と15件報告され、報告された総数の半分以上を占めている。もっとも少なかった報告は「聞き取りレベル」9件であることが分かった。このことから、音声を正確に認知できているものの、言語知識の不足から問題が生じていると考えられる。

5.5 下位分類の分析

表3から、「聞き取りレベル」と「談話統合レベル」の問題がCSの正答率に大きな影響を与えていることがわかる。「語彙レベル」と「談話統合レベル」の問題がMSの正答率に大きな影響を与えていることがわかる。

本節では、CSが音を聞き取りにくい原因と聞き取れない音の特徴を探る。さらに、MSが単語の音を正確に聞いているにもかかわらず、意味の理解に至らない原因を明らかにする。

5.5.1 聴解過程に起きる問題特定の「聞き取りレベル」に関する分析

被験者に特定された「聞き取りレベル」の問題の例を表4に示す。間違った聞き取りの主な要因を分析してみると、CSが聞き取りにくい単語には以下のような特徴が見られる。

- ① 単語の促音と長音の脱落が多い。また、長音が入っていない単語に長音を入れて長音化している。
- ② 日本語無声破裂音の[p,t,k]を有声破裂音[b,d,g]として認識している。
- ③ モーラ数が5拍以上の単語において音の脱落が多い。
- ④ 母音の[a]と母音[e]の音を混同して認識している。

表4 MSとCSの「聞き取りレベル」問題特定一覧表(一部)

被験者	項目	正用の言葉	間違った聞き取り	発生した場所
CS 3	4	してない	したい	母音[e], [na]の脱落
CS 6	9	目覚まし時計	めざしいどき	[ma]の脱落、[i]の添加、破裂音[t]
CS 7	30	遅刻	ちゅうごく	拗音の添加、母音[u]の添加
CS 9	1	スカート	スガド	破裂音[k], 破裂音[t], 長音
CS 2	26	美颯さん	ミラさん	長音、母音[e]
CS 3	2	アパート	デパト	破裂音[d], 母音[a], 長音
CS 3	1	値段	ネドン	母音[a]
CS 3	26	大変ですね	てはんですね	母音[a], [i]の脱落
CS 3	26	報告書	ほこしょう	長音、[ku]の脱落、破裂音[g], 長音の添加
CS 5	3	読みたい	飲みたい	半母音[j]
CS 5	26	取引先	とりとし	[hikisaki]の脱落、[tos]の余剰

CS 7	4	写真の現像	写真ぎんぞ	母音[e]、長音、母音[e]の脱落
CS 8	16	駅ホーム	駅ほむ	長音の脱落
CS 8	20	出入り	で一り	長音の添加、母音[i]の脱落
CS 8	26	取引先	とりさき	[hiki]の脱落
CS 9	3	主人公	しゅじんご	破裂音[k],長音
CS 10	9	音量	onglyo	鼻音、長音
MS5	4	写真の現像	写真げんぞ	長音
MS3	30	目覚まし時計な らなくて	目覚まし時計なくて	[nara]の脱落
CS 10	30	目覚まし時計な らなくて	目覚まし時計なくて	[nara]の脱落、
CS 9	4	とりひきさき	とりさき	[hiki]の脱落
CS 2	1	ブランド	blangd	母音[u]、子音[l]
CS 2	30	ねぼう	ねぼ	長音の脱落

(注：太字と網掛け部分は中国籍モンゴル母語話者が聞き間違った部分)

5.5.2 問題特定の「語彙レベル」

聴解問題は読解問題と違って繰り返して聴き直すことが出来ないという制約がある。そのため、聞き取った音声から、瞬時に語の意味を確定し話の内容を推定していくことが難しいと考えられる。尹(2002)は、たとえ聞き取った単語が既知語であっても、聴いてすぐ音と意味を結びつけることは難しいと述べている。今回の聞き取り調査で、音声として正確に聞き取れたにもかかわらず、意味の理解に至らなかった単語には以下の特徴が見られる。

表 5 によると、音声として正確に聞き取りながら意味を理解できなかった単語は、MS が 14 件、CS が 8 件であることがわかる。意味の理解に至らなかった単語を単語の出自によって分類してみると、MS は和語 4 件、漢語 5 件、外来語 4 件、混種語（和語＋漢語）1 件であった。CS は和語 2 件、漢語 3 件、外来語 1 件と混種語（和語＋漢語）2 件であった。このことから、MS は、CS に比べて漢語、和語と外来語の理解がやや難しいようである。意味の理解に至らなかった「レシート」などのような外来語に関しては、CS はそれら外来語を音として特定できなかったことが表 4 に示されている。したがって、両者の聴解テストにおける正答率の差に外来語はそれほど影響

を与えてないといえよう。

表5 MSとCSの「語彙レベル」問題特定一覧表

被験者	項目	正用の言葉	単語の種類
CS 7	4	コンビニ	外来語
CS 10	4	客	漢語
MS 4	2	コンビニ	外来語
MS6	4	レジ	外来語
MS7	4	基準	漢語
MS3	4	現像	漢語
MS3	20	月末	漢語(週末と報告)
MS4	2	いつもは	和語
MS6	2	通勤	漢語
MS6	4	お弁当	混種語 (和語+漢語)
MS7	9	レシート	外来語
MS8	2	ブランド	外来語
MS9	2	奇遇	漢語
CS 3	4	暖める	和語(放送と報告)
CS 3	20	3月	漢語(3回と報告)
CS 7	2	奇遇	漢語
CS 7	20	出入り	和語
CS 8	9	目覚まし時計	混種語 (和語+漢語)
CS 9	30	寝坊	混種語 (和語+漢語)
MS2	2	通いづらい	和語
MS3	20	とにかく	和語

(注：太字と網掛け部分は中国籍モンゴル母語話者が聞き間違った部分)

5.5.3 問題特定の「談話統合レベル」

『日本能力試験出題基準』(2002)によると、日本語能力試験の2級の聴解問題にはテキストの内容に複雑な情報が入っている。その情報の共通点や相違点を弁別できる能力が必要である。今回の聴解テストのレベルは日本語能力試験の2級の聴解問題に

相当するものである。つまり、これらの問題を解く為には複雑な情報を統合する必要がある。そこで、「談話統合レベル」の問題特定が母語別にどの項目に集中しているかを分析した。

その結果、両グループとも「項目 2」、「項目 3」のように、質問に対する選択肢の表現が、テキストの表現と違って類似表現に言い換えられている「項目」と、テキストが短い上に、文脈情報や関連の情報が少なく、話し言葉のフィラーが多く含まれ内容が不明瞭である「項目」に集中していることが分かった。

6. 考察

本稿の統計調査では、MS のほうが CS より日本語聴解テストの正答率が高い結果が得られた。このことから、MS のほうが CS より日本語の聴解能力が高いと考えられる。

また、本稿では正答率に影響を及ぼす要因を聴解過程に注目し、プロトコル分析を行った。その結果、音が特定できない問題、つまり「聞き取りレベル」は両グループの正答率の差に大きな影響を与えていることが分かった。MS に比べ CS が聞き取りにくい単語には以下のような特徴が見られる。

(1) CS は促音長音が入っている単語の促音と長音を認識できず、促音と長音を短音化している。また、長音が入っていない単語に長音を入れることが多い。しかし、MS には上記のような現象がそれほど見られなかった。それは、MS は促音と長音について以下のように認知しているからではないかと考えられる。モンゴル語の中に「デビスゲルウスグ」がある。「デビスゲルウスグ」といった [n・m・l・o・b・r・s・d・g] の結尾子音が開音節に連続して一つの閉音節を作っている。特に、二つの子音が連続したひとつの単語を発音するときの音は、日本語の促音に近く聞こえる。たとえば、モンゴル語の自然の会話の中では「物をとれば」を [appā1] と発音する (ナ・ゴチョクスロン (2007) より)。また、モンゴル語の母音の分類の中では、長母音と短母音の分類があり、長音の長さは一般的に短音の長さの倍になる。このことから、MS は CS より日本語の長音と短音を弁別しやすいと考えられる。

(2) 日本語無声破裂音の [p,t,k] を有声破裂音 [b,d,g] に認識している。北京語 (中国語) では無声有気音 [p^h, t^h, k^h] と無声無気音 [p,t,k]、の 2 つのカテゴリーがあるが、日本語は無声無気音 [p,t,k] と有声無気音 [b,d,g] の 2 つのカテゴリーである。つまり、日本語と中国語とでは弁別特徴・カテゴリー境界が異なっている。そのために、CS にとって日本語の破裂音の知覚に障害が生じると考えられる。

一方、モンゴル語も無声有気音[p^h, t^h, k^h]と無声無気音[p,t,k]、の2つのカテゴリーに分かれるが、結尾子音には有声音の[b,d,g]が存在するので、CS と比べるとそれほど大きな障害は生じないと考えられる。

(3) CS は MS に比べてモーラ数が5拍以上の単語において音の脱落がやや多いことが分かった。それらの単語は以下のような特徴が見られる。

【動詞】

- ① 「項目 20」の「土曜日だと予約が入れられないかもしれない」
- ② 「項目 30」の「目覚まし時計がならなくて、起きるのが遅くなって」

【名詞】

- ① 「項目 9」の「目覚まし時計を買ったんだけど」
- ② 「項目 26」の「今日の取引先との話の内容についてなんです」

に集中している。一方、MS も「聞き取りレベル」の問題特定の中で一番多く報告されたのは、モーラ数が5拍以上の単語における音の脱落である。それは、聞き取りの処理に関しては両グループともボトムアップ処理がよく使われていると考えられる。しかし、両グループの報告の形式が違っていた。MS の報告によると「目覚まし時計がならなくて」の「なら」があるかどうか迷ったという報告が多かった。それに対し、CS の報告によると、「目覚まし時計がならなくて」を「なになになくて」或いは「なになにない」といった代名詞を使って説明している。

試験後のインタビューによると多くの MS の学習者は単語を日本語の発音のままに覚えるのに対して、多くの CS は漢字に依存するか、あるいは中国語に訳して覚えるということが分かった。動詞の活用に関しては、モンゴル語は日本語と同じく膠着語であることから動詞が活用される。それに対して、中国語は孤立語なので動詞に活用がない。このことも大きく影響していると思われる。

(4) CS は MS に比べて、母音[a]または母音[e]が入っている単語に誤りが多い。つまり、母音の[a]と母音[e]の音を混同して認識している。中国語の母音の中に[e]が存在しないので、日本語の[e]母音を発音しにくいのではないかと考えられる。一方、モンゴル語にも[e]母音がないが、[æ]母音があるので、認識しやすいのではないかと考えられる。

次に、聞き取り問題上の「語彙レベル」に関しては、MS に多く見られ、CS に比べて漢語、和語と外来語の理解がやや難しいようであった。外来語に関しては、CS はそれら外来語を音として特定できなかったことが「聞き取りレベル」の分析で分かる。したがって、両者の聴解テストにおける正答率の差に外来語はそれほど影響を与えて

ないといえよう。一方、和語に関しては、試験後のインタビューによると、「いつもは？」の「いつも」の意味は理解しているが、「は」をプラスにして後ろの部分を省略した質問を「いつもは」という単語だと間違い、意味が分からなかったという。つまり、述部の省略により、問題が起きたと考えられる。漢語に関しては、両者と意味が分からなかった単語の「奇遇」と「現像」は2級以上の語彙であることが分かった。

それから、問題特定の「談話統合レベル」に関しては、母語別に大きな差が見られなかった。しかし、「談話統合レベル」の問題が多く起きた「項目」には、①質問に対する選択肢の表現が、テキストの表現と違って、類似表現に言い換えられている。②テキストが短く、文脈情報や関連の情報も少なく、話し言葉のフィラーが多く含まれ、内容が不明瞭である、という特徴が見られた。

7. 今後の課題

今回の調査では、CSは日本語の促音、長音、破裂無声無気音[p,t,k]、そして母音の[e]の知覚がMSと比べて弱いことが分かった。その原因は母語の違いによると推測したが、さらに実証的な研究が必要だと思われる。

また、聴解過程に起きる問題特定をいかに処理しているか、どのようなストラテジーによる問題処理が聞き取りを成功させるかということを経後の研究課題にしたい。

さらに今回の調査は、中国に在住する日本語学習者だけを対象に行ったが、日本に居る学習者を対象としていない。今後は、日本にいる中国人学習者を母語別に分類し、調査を行い、中国に在住する日本語学習者の結果と比較したい。

参考文献一覧

- 尹松(2000)「聴解における先行オーガナイザーの効果について—日本語を主専攻とする中国の大学生の場合—」『人間文化論』第2巻 pp.33-42
- 尹松(2001)「聴解ストラテジーの使用と聴解力の関係について—日本語を主専攻とする中国人大学生の意識調査の結果から—」『言語文化と日本語育』第21号 pp.58-69
- 尹松(2002)「パターン学習は理解を促進させるか—ラジオニュースの聴解の場合—」『日本語教育』112号 pp.35-44
- 海保博之・原田悦子(1993)『プロトコル分析入門』新曜社
- 神村初美・劉永亮・柳悦・彭韻・林香淑・神谷英里・陸黎莉・十市佐和子・西郡仁朗(2010)「TMU聴解テストの開発について」, 『人文学報』, 首都大学東京都市教養学部人文科学研究科
- 国際交流基金(2007)『平成16年度日本語能力試験 分析評価に関する報告書』凡人社
- 島田めぐみ(2006)「日本語聴解テストにおいて難易度に影響を与える要因」『日本語

教育』129号 pp.1-10

島田めぐみ・侯仁鋒(2009)「中国語母語話者を対象とした日本語聴解テストにおける
選択肢提示形式の影響」『世界の日本語教育』19号 国際交流基金日本語国際セン
ター pp.33-48

古川ちかし他(1992)「ペア形式による調査のプロトコル分析」『日本語聴解問題の改善
に関する考察—最終報告書—』日本教育学会 pp.173-235

水田澄子(1995)「日本語母語話者と日本語学習者(中国人)に見られる独話聞き取り
のストラテジー」『日本語教育』87号 日本語教育学会 pp.66-78

水田澄子(1996)「独話聞き取りにみられる問題処理のストラテジー」『世界の日本語
教育』第6号 国際交流基金日本語国際センター pp.49-64

ମାତୃ ଭାଷାଭାଷୀଙ୍କ ପାଇଁ (2007) «ମାତୃ ଭାଷାଭାଷୀଙ୍କ ପାଇଁ ଭାଷା ଶିକ୍ଷା ଉପରେ ଗବେଶାତ୍ମକ
କାର୍ଯ୍ୟକ୍ରମ 2007-08 ମସିହା ..

(りゅう えいりょう・首都大学東京大学院)